

ハイデガー『存在と時間』における「良心」について

高井寛（東京大学大学院）

ハイデガー『存在と時間』は、人間の在りようを分析している。

その書の本来の目的は「〈存在の問い〉の仕上げ」だが、その問いを問うのが人間である以上、「問う」という行為がそこで説明可能となる「人間の存在論」、世界の中でさまざまに行為しつつ生きる人間の、その在り方を解き明かす理論が必要であるとされる。

こうした企図をもって書かれた『存在と時間』の「日常的な在り方」の分析は、人間の生の実状を無駄のない概念装置によって解き明かしており、ハイデガーがそこで捉えようとしている「現象（人間のすがた）」がどのようなものであるかを理解するのは、具体例の多さも手伝って、比較的たやすい。

しかし、その「日常的なあり方」とは区別されるかぎりでの「本来的な在り方」にかんするハイデガーの議論は、人間の在りように丁寧に寄り添ってきたそれまでの分析の手づきを廃棄したかのように、死への先駆、決意した在り方、選択、良心などの術語を次々と導入し、また方法論的な前提も複雑であるため、分かりやすい議論の運びになっているとは言い難い。

本発表は、「良心」にかんする彼の議論を読解することを中心的な課題としている。それは、ハイデガーが「本来的な在り方」ということで捉えようとした人間の在りようを理解するには、その作業を避けて通ることができないからである。

本発表ははじめに、「本来的な在り方」の規定を際立たせるため、「日常的な在り方」にかんするハイデガー議論を簡単に整理する。

本発表は続けて、「本来的な在り方」の内実を明らかにすることを目指し、「良心」の議論を検討する。とはいえ、その目的を達成するために「良心」論を選択した正当性が、まずは示される必要があるだろう。これまでの解釈においてはしばしば、「死」にかんするハイデガーの議論に定位しすぎるあまり、「本来的な在り方」の意味を見失う傾向がみられるからである。

「良心」をめぐるハイデガーの議論の解釈は、「本来的な／固有の *eigen*」であるとか、「最も固有の *eigenst*」という形容詞をいかに理解するかに懸かっている。

本発表の結論は、ハイデガーが「良心」によって語ろうとしているのは「実存の問い」を問うことであり、件の形容詞はこの「実存の問い」から理解される必要がある、ということである。

なお時間が許せば、これに加えて、ハイデガーに対する苛烈な批判者である（とされている）E.レヴィナスによる「良心 *conscience moral*」の議論を一瞥し、「良心 *Gewissen*」という概念によってハイデガーが捉えようとした事柄の意味をより鮮明することを試みたい。